

ペーター・ローダーマイヤー

響きの色彩、色彩の響き。岡田ムツミ

Román népi táncok という曲がある。作品目録に BB68 として収められている、ベラ・バルトークが 1915 年にピアノのために書いた曲で、日本語にするなら「ルーマニアの民族舞曲」となる。彼がトランシルヴァニアを旅して学者のごとき綿密さで記譜・収集した 1100 以上ものメロディーの中からの 6 つがこのピアノ小品集に収められている。岡田ムツミが 2013 年に描いた、24×18 cm の 6 つの小品からなる油彩の連作は、こうして生まれた音楽を出発点としている。ある日本人女性が画家として 30 年以上ドイツに住んで、あるハンガリーの作曲家が 100 年以上も前にルーマニアの民族音楽を採集して編曲をしたものに触発されてこの作品を描いた。芸術には時間や空間や国籍の壁はないということを、これ以上美しく端的に示しうるであろうか。そしてその繋がりにはさらに広がっていく。サブタイトルに岡田は「パレルモへのオマージュ」と記している。実際この「ルーマニアの民族舞曲」を鑑賞するとき、ドイツの画家プリンキー・パレルモがアメリカ合衆国で描いた小品集を思いさすにはいられない。たとえば彼が 1975 年に描いた 26.7×21.0 cm の 4 連作「コーニー島」の構成と、岡田の「ルーマニアの民族舞曲」は実によく似ている。いうまでもなく岡田の主観的な色面絵画と、構造主義が行き着く先としてのパレルモの絵画構成とは大きく違ってくる。パレルモは中心の色に突きあわせて上下に同じ色彩の細い帯を塗っているが、岡田の場合は中心の色彩をまず塗った上に上下に違う色彩を塗り重ねている。岡田にあって、一枚一枚の個性と連作全体のリズム的な効果は、音楽とその効果として感じられるものに由来するのであって、形だけを考慮して生まれたものではない。

岡田ムツミは画家として、高さ 2 メートルを超す大作に劣らぬ迫力や臨場感を、小品や中規模の作品にも込める力量を持っている。それゆえ「ルーマニアの民族舞曲」という小さな 6 連作を前にすると、カタログと展覧会のタイトルである「その色の時」がよく理解できる。岡田ムツミ作品のメインテーマは、色彩と、色彩の及ぼす作用である。色彩というものは一見、日常ありふれていてわかりきったもののものであっても、いつでもどこにでもある、そうしたものと意識的取り組みを徹底させることは、実は限られた時間でしかできないことなのだ。岡田ムツミの作品には、見る力とある程度の時間が必要で、それなくしては色と色の響きを受け止めることはできないのである。それは創作の現場でも同じであって、画家本人にとっても、同様な集中力と感受性が高まった特別な時間の中でのみ、色彩を芸術的にアーティキュレートすることが可能なのである。音楽はそれを理想的にお膳立てしてくれる。なぜなら、時間を組み立てることで時間を体験可能にするのが音楽に他ならないのだから！ 音楽は一時的に例外状況を作り出す。岡田の作品の多くは音楽を聴く特別な時間の中に生まれたものであり、じかに音楽と関連付けたものもある。音楽の性格をできるだけ可視化すること、音楽を色と形に置換する際に音楽と絵画に共通する、明暗・軽重・遅速・遠近などの度合いを重視している

と、この芸術家自身が語っている。「ルーマニアの民族舞曲」で彼女は、全体合わせても4分余りしかない6つの小品に一枚ずつの絵を献じた。それぞれ強い色彩を基調に、二つの違う色彩の細い帯でそれを挟むようにすることで色彩の三和音に拡張されるという手法を選んだ。「棒踊り」と関連付けられた一枚目は、まれに見る強い筆跡と明らかな重ね塗りを見て取ることができる。そこに創作作業の第一歩、つまり音楽をそれに適した色効果に置き換える取り組みを、とてもよく読み取ることができる。それに続く絵では、卓越した色使いを見ることができる。音響的記号から視覚的記号への「正確な」翻訳は存在し得ないのは明らかだが、ベラ・バルトークのピアノ作品を知っていれば、音楽と絵画との関わりの繋がりを見出すことは十分可能である。たとえば、「踏み踊り」という題に似合わず、水銀の粒のように高く舞う音が個性を与えている舞曲3番は、シルバーグレイで基調を繊細に構築することで、曲にふさわしい三枚目の絵となった。そして、見るものを底知れぬ深みに吸い込みそのような濃青 - 黒と紫によってさらに強調された四枚目の基調には、深いアラブ風の色調を使ってあり、6つの踊りのなかでもっとも神秘的な「角笛の踊り」の性格に似つかわしい。

また岡田の2015年作の39×31cmの一枚「白と黒」もピアノ音楽と関連があり、それはクロード・ドビュッシーの2台のピアノのための「白と黒で」で、バルトークの「ルーマニアの民族舞曲」と同じ1915年に作曲されている。ドビュッシーのタイトルはピアノの白鍵と黒鍵のことを言っているのだが、岡田の作品の黒い領域が上に5カ所ほど張り出しているのが鍵盤を暗示しているとも見られるかもしれない。上半分の白は均一で構造を感じさせない一方、黒い部分は不均等な構造を持ち、ごつごつしていて、手触りを感じさせる。黒と白の間には狭く不均等な輪郭のない部分があるが、ここには地塗りをしていない素地がすこし見えていて、それはつや消し加工をしたアルミ板である。見る角度や光の加減によって、黒と白の間をつなぐシルバーグレイは、光る明るさや色を変えてゆく。

薄いアルミニウムと銅の板を岡田ムツミは2012年以来、油彩画の素地として使っていて、金属そのものがここでは同等に表現手段となりうる。2013年作の「銅に緑」という作品はその好例である。この縦長の作品は赤く光る銅の素地の半分と、淡く明るい緑に塗られた半分とで左右に分割されている。双方が出会うところで色の塗りはやや薄くなって、銅の赤が塗りを通してわずかに光っているのが見える。この補色の対比は極めて柔らかく、ほのめかす程度である。そこに岡田ムツミの音楽性に強く影響を受けた繊細な色彩感覚を見ることができる。この芸術家は色彩をまず関係性の中に見ている。つまり、それぞれの色調は、ひとつあるいは複数の他の色調との関係の上に立っており、それが集まって、さまざまなニュアンスの色彩の響きや、色彩の和音を奏でるのだ。